HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	宗教改革400周年記念再考
Author(s)	小柳, 敦史
Citation	北大宗教学年報, 1, 52-53
Issue Date	2018-08-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/71511
Type	other
File Information	1_7_koyanagi.pdf



Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

【研究発表要旨】

宗教改革 400 周年記念再考

小柳　敦史

ルター像は時代状況や思想家の関心を反映してきた。とりわけ、宗教改革から 100 年ごとの節目には、集中的にルターについての言説が生み出されてきた。本発表では、1917 年の宗教改革 400 周年がどのように祝われ、そこでルターはどのように語られたのかを明らかにすることで、当時のキリスト教思想の状況について理解を深めたい。

1917 年は第一次世界大戦の開戦から 4 年目を迎え、ドイツ社会の疲弊が深まっている時期であった。それゆえ、宗教改革 400 周年を盛大に、それも国際的な祝祭として祝うことは不可能であった。そういうわけで、ハイライトとなるような祝賀祭は行われなかった 1917 年であるが、その代わりに宗教改革やルターに関する著作物が大量に刊行された。このような、大学人を中心として生み出されたルター言説において支配的だったのが、戦意高揚のための「ドイツ的ルター」の像であった。しかしながら、ナショナリスティックなルター像を提示する主流派に同調しない立場も存在した。宗教改革 400 周年記念は、ルターをドイツ性の観点から理解する、当時のルター派教会の公式見解に対する批判的な態度決定を促したのである。この意味で、宗教改革 400 周年記念は神学的リベラリズムの試金石となった。ただし、「ドイツ的ルター」への反対が、戦争への反対を意味するわけではなかったということも指摘しておきたい。ラーデは 1917 年の時点で明確に戦争の終結を訴えていたが、トレルチには戦争の継続を容認するような発言も確認できる。さらに、ホルはラーデやトレルチから距離をとり、戦争の継続を支持する側に立っていた。

「ドイツ的ルター」の称揚に反対する神学者たちが注目したのは、ルターの宗教性であった。その関心は、当時のドイツの宗教状況に対する問題意識に根ざしている。「ドイツ的ルター」という見方に反対する神学者の一人であったトレルチは、「教会外の宗教（die außerkirchliche Religion）」に注目する必要性を説く。「教会外の宗教」は近代ドイツ社会の宗教問題の解決ではなく、問題そのものであったが、それは現状のキリスト教会よりも重大な問題であった。宗教改革 400 周年記念はそのことをはっきりと認識させる契機となった。

宗教改革 400 周年のドイツにおいて「教会外の宗教」の重要性が高まっていたのなら、「教会外の宗教」が宗教改革 400 周年をどのように迎えたのかは注目に値する。そこで、編集者ディーデリヒスの下で「教会外の宗教」を求める運動を展開していた雑誌『タート』

（*Die Tat*）を見てみたい。『タート』に集まった、あるいはディーデリヒスによって集められた著述家たちの宗教的立場や関心は様々であり、そこに統一的なルター理解や宗教改革評価を見出すことは難しい。それでも基本的な方向性としては、（1）教会批判者としてのルター理解、（2）ルターにおける生の宗教性の発見の重要性、（3）（時にゲルマン性と結びつく）知識人宗教としての新たな宗教運動の必要性、といった内容を取り出すことができる。保守的ルター派の称揚する「ドイツ的ルター」に対してルターの内面的な宗教性に注目するという、『タート』の寄稿者たちに認められる発想は、リベラルな神学者たちと共通するものであった。

この時期にディーデリヒスからラーデへと送られた手紙を読むと、彼らは共通の問題に取り組んでいるとお互いに認識していたことが伺える。帝国と一体化したドイツ・プロテスタンティズムによって定式化されたルター像への批判は、保守的ルター派に対して距離をとるプロテスタント神学者たちの内部だけではなく、「教会外の宗教」とも共有されていたのである。宗教改革 400 周年記念は、ルターをドイツの英雄として祭り上げる言説を大量に生み出した裏側で、プロテスタンティズムと「教会外の宗教」を接近させるという側面も持っていたのである。